

05

開講年次：学部1年生第3クォーター

[担当教員]

後藤沙羅（助教）

[Teaching Assistant]

大中吾一 (A71) 谷口翔一 (A71) 松森梨佳子 (A71)

■ 課題概要

建築をデザインする上で必要となる基礎的な造形力を獲得することを目的とし、立体造形制作（紙を素材とした立体構成作品や、スケール感覚を養う立体作品の模型・シート制作）を通じて、構成力や造形力を習得するとともに、形態や色彩感覚、素材の質感、スケール感覚、平面と立体との関係などの空間造形感覚とそれらを表現する能力を養う。また、課題を通してスタジオからプレゼンテーションまでのスキルを身につける。

紙を素材とした立体構成作品制作については p.26 参照。スケール
 感覚を養う立体作品制作については、彫刻・マテリアルを展示するため
 の光を利用したギャラリーの制作を行う。

■課題スケジュール

内容	制作課題
ガイダンス	－
即日課題（ゲスト講師：大谷弘明先生）	紙の立体構成作品
模型制作	スケール感覚を養う 立体作品 (彫刻・マテリアルを展示 する光のギャラリー)
模型制作	
模型仕上げ・シート作成	
模型仕上げ・シート作成	
講評会（全員発表）	

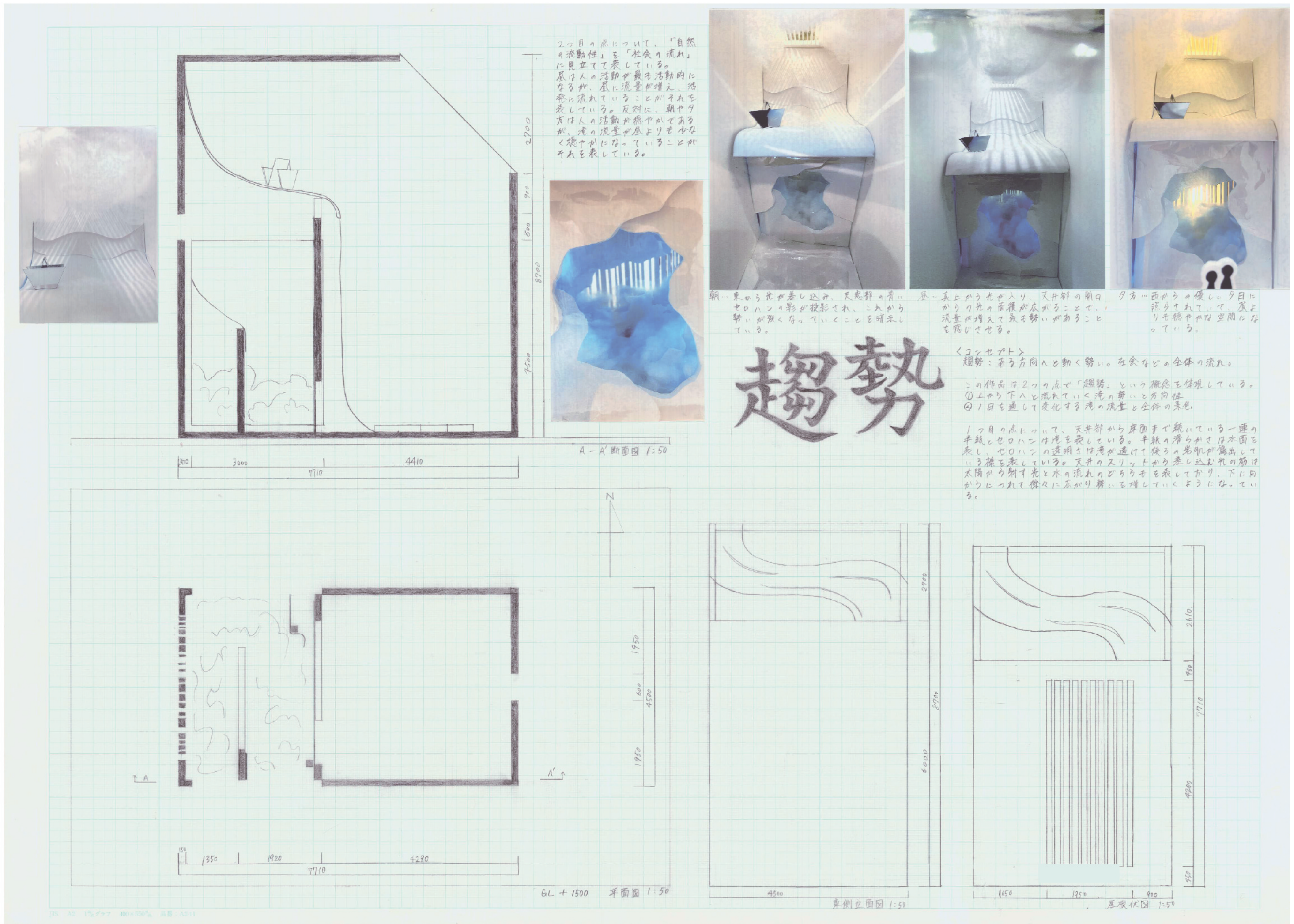


講評会の様子



講評会の様子

片山絵実理「趨勢」



設計基礎 A2（旧設計基礎 A）

即日課題『美しく高い塔、自分たちが考え出した塔。』

〔担当教職員〕
大谷弘明（客員教授／日建設計 CDO 常務執行役員、チーフデザインオフィサー）
槻橋修（教授）後藤沙羅（助教）
〔Teaching Assistant〕
大中吾一（A71）谷口翔一（A71）松森梨佳子（A71）

■課題概要

建築とはオブジェではありません。見るものではなく使うもの、体験するものです。人間を取り巻くすべてが建築といっても過言ではありません。みなさんは今後、未知の空間体験をたくさんしていくはずですよ。今日は、みなさんと建築をつくるとはどういうことなのか、一緒に考えたいと思います。考えるといっても頭で考えるではありません。手を動かしながら考えます。建築とはこれらの思考と試行の果実なのです。

みなさんの頭の中にある塔のイメージをもとに実際の立体を造形しましょう。夢に出てくるような美しい塔、これをチームの力でつくってください。考えながら形にし、実際に組み上げ、出来上がりを他チームと比べ、感じて、批評しあう、これらのプロセスそのものが、建築設計です。これらの活動すべてが建築的な原体験となります。

- ・日 時 10 月 20 日（金）3、4 限（13:20 ～ 16:40）
- ・場 所 百年記念館 六甲ホール・ホワイエ
- ・時間配分 各自の作業場確保 13：00 ～ 13：20 @ ホワイエ
事前説明 13：20 ～ 13：25 @ ホール
制作 13：25 ～ 15：55 @ ホワイエ
作品の移動 15：55 ～ 16：00 to ホール
講評 16：00 ～ 16：30 @ ホール
清掃 16：30 ～ 16：40
- ・材 料 A3 ケント紙 20 枚
- ・持ち物 定規、はさみ（カッターは不可）、テープ、ホッチキス、作品を持ち帰るための袋、床に敷くビニールシートや段ボール、マットの類、床での作業用の動きやすく汚れても平気な服装

- * 課題当日までにチームとなったメンバーで集まり、ブレインストーミングを行いましょう。ここが肝心。他のチームをどのように出し抜くかの戦略を練らなければなりません。
- * 出来るだけ大きく高くつくりましょう。
- * ケント紙は 20 枚全部を使い切り、余らせてはいけません。
- * ケント紙の材料特性をよく理解し、効率的な作業時間と構造的な安定性の確保を同時に達成しましょう。
- * 出来上がった塔は、より大きく見えるように下から見上げて撮影しましよう。できれば自然光のもとで。



作品制作風景

■大谷先生コメント

今年から個人の作ではなくグループによる製作に切り替えた。百年記念館のホール舞台に様々な工夫を凝らした、高さ、意匠ともに多彩な「塔」たちが立ち上がった。壮観の眺めであった。この日の経験が皆さんにとって建築の原体験のひとつとなるはずだ。神戸大学の工学部建築学科に入学された皆さんは、これからまさに建築というものに直に向き合える。この素朴で童心に帰るかの喜びをまず感じてほしい。



課題を終えて、毎年のことだが今後のためいくつかの助言を申し上げる。この課題は自由な発想を前提としている。グループに20枚のケント紙が与えられたなら、それを余さず使い切るように工夫しなければいけない。1 週間前にお題とグループ分けを発表したのも話し合いと作戦を立てる時間を与えるためであった。できるだけ高く、というテーマを実現するに際しては、ケント紙の特性の理解（硬さ、しなやかさ、どのくらいのアールなら曲げやすいか）、あるいは加工の工数を減らして強度を保つ方法、つまり「楽しんで得する」作戦、などよくよく考えて欲しかった。建築世界には常に重力（1G）との戦いがある。

一方、製作中の各グループの動向を（横目に）観察することも大事。同じ方角に向けて走らない。みな同志でもありライバルでもある。いかにして抜け出るか（抜け駆けするか）、同じ時間と同じ材料を使いながら、どのように他とは違うオリジナリティを生み出すか常に考えてほしい。競争と言うとなにか悪い響きを感じるかもしれない。だが、多くの人たちの中から選りすぐりのアイデアを引き出すために、競争＝コンペを避けては通れないのが建築世界の現実である。実際敷地は一つしかないから、複数案を同時に建設してみることはできない。この日、この課題で、これらのことを同時に一気に体験してもらおうと試みた。



大谷先生の全体講評（上）各グループの作品講評（中）槻橋先生の全体講評（下）